



高校生が取り組むキノコ展

六甲山のキノコ展は、今回で第15回目の開催となります。毎年、県立御影高校環境科学部の生徒が主体となって、展示会を企画し、六甲山で採集したキノコの標本をとことん狭しと展示しています。高校生が主体ですが、どこの博物館に負けないほどの本格的な展示会となっています。展示会では年によって陳列する個数は変わりますが、形や色、大きさが様々な300～500点のキノコ標本が並ぶので圧巻の風景となります。森のなかで立ち止まって観察しても、視野にはせいぜい数十種類程なので、単位時間あたりに目にする種類は圧倒的に多く、否応なく多様性に気づくこととなります。特に、キノコの場合には、加工処理をしなければ、原形が維持されずに腐ってしまうので、山の近くに住んでいても、多様なキノコを一堂に比較観察することは難しいのです。多様性をリアルに実感するには、原型を保持して標本化するしかありません。つまり、博物館が標本を蓄積し、保存しているからこそ、実現できる風景です。ただし、標本をしっかりと蓄積するには、野外で採集し、保存処理し、名前を鑑定して、整理して保管する必要があります。この役割は博物館の学芸員の仕事ですが、当博物館には、キノコを専門とする学芸員はいません。したがって、キノコ展を実施するのは困難な状況でした。

そんなときに、県立御影高校と兵庫きのこ研究会の方々からお声をかけていただき、キノコの標本づくりや展示会を行いたいとの依頼がありました。対応した私は水生生物が専門なのですが、先方は私が得意とする樹脂を活用して型崩れせず長期保存できる標本を見て、これをキノコをテーマに実施したいとのことでした。学校だけでなく、研究会のメンバーも関わっていただくことでピースが揃い、15年目を迎えています。毎年、生徒や研究会の方々から収集してくる標本は蓄積してゆき、中には珍しいキノコが発見されたり、データ解析によって新発見があるなど、年度ごとにユニークな展示会となり、好評をいただいています。展示会を見た他の博物館や施設にも貸出しすることで、多様な交流が生まれると同時に、高校生にとっても貴重な実践学習の場となっています。



写真1 六甲山でのキノコ採集の様子 兵庫きのこ研究会の指導のもとで様々なキノコを調査している

今回の展示について

六甲山では、意外かも知れませんが、これまでに1000種類以上のキノコが見つかっています。単に標本を羅列するだけでは、詳しい人以外は訳が分からなくなります。展示では、まずはキノコの基本的な特徴やよく知られたキノコ、野外で生えていたときの写真をパネルや映像で紹介するところから始まります。そして、キノコが果たす機能、例えば「毒と薬」、「美味か不味いか」、「レアキノコと良くみられるキノコ」、「ユニークな形のもの」など多角的にテーマを設定して、展示を行っています。また、キノコは匂いも特徴的なものが多いです。さすがに標本を手にとって匂いを嗅ぐということは出来ないので、特別に蒸留抽出して、様々な匂いを嗅ぐことができるコーナーも用意しています。さらに、綺麗な標本の作り方や御影高校の活動の歴史やメディア等に取り上げられた内容（新聞切り抜き）、これまでに学会等で発表してきたポスターなども紹介しています。

展示会のサブタイトル「地球はキノコで出来ている」というテーマに納得いただけるよう、地球の歴史や日本史の中で、キノコがどのように登場し、活用されてきたのかを大きなパネルで説明しています。そしてキノコが生態系の循環、特に分解者として果たす役割について、図や標本を使って解説しています。こうした説明や多様なキノコを一堂に並べて見ていただくことで、私たちの生活のなかで欠かすことが出来ない生物群であることを知り、近くの野原を散策するときにも、キノコに目を向けていただければと思います。

保存技術と魅せる技術

この展示会の特徴は、何と言っても多様性です。キノコの標本を綺麗に作成し、しっかり記録し保存する。この基本どおりに、たくさんの標本を蓄積してきたことにあります。干乾びたキノコをただ学校の倉庫に格納しておくだけだと、このような活動は15年間続かなかったと思います。展示づくりを通じて、成果を発信する場があり、様々な交流があったこと、そして何よりも綺麗に魅せる標本として製作できることが、大きな継続力の源泉になったのではないかと思います。部活動の積み重ねと市民活動が共鳴することで、そのまま学術的にも展示面でもかけがえのないコレクションになっています。こうした活動と技術の組み合わせを創出することも大切な博物館の役割です。

三橋弘宗（生態研究グループ）



写真2 特殊樹脂を用いた標本の作成の様子



写真3 樹脂加工したリアルなホコリタケ



写真4 おそらく世界に一つ、イカタケの樹脂封入標本